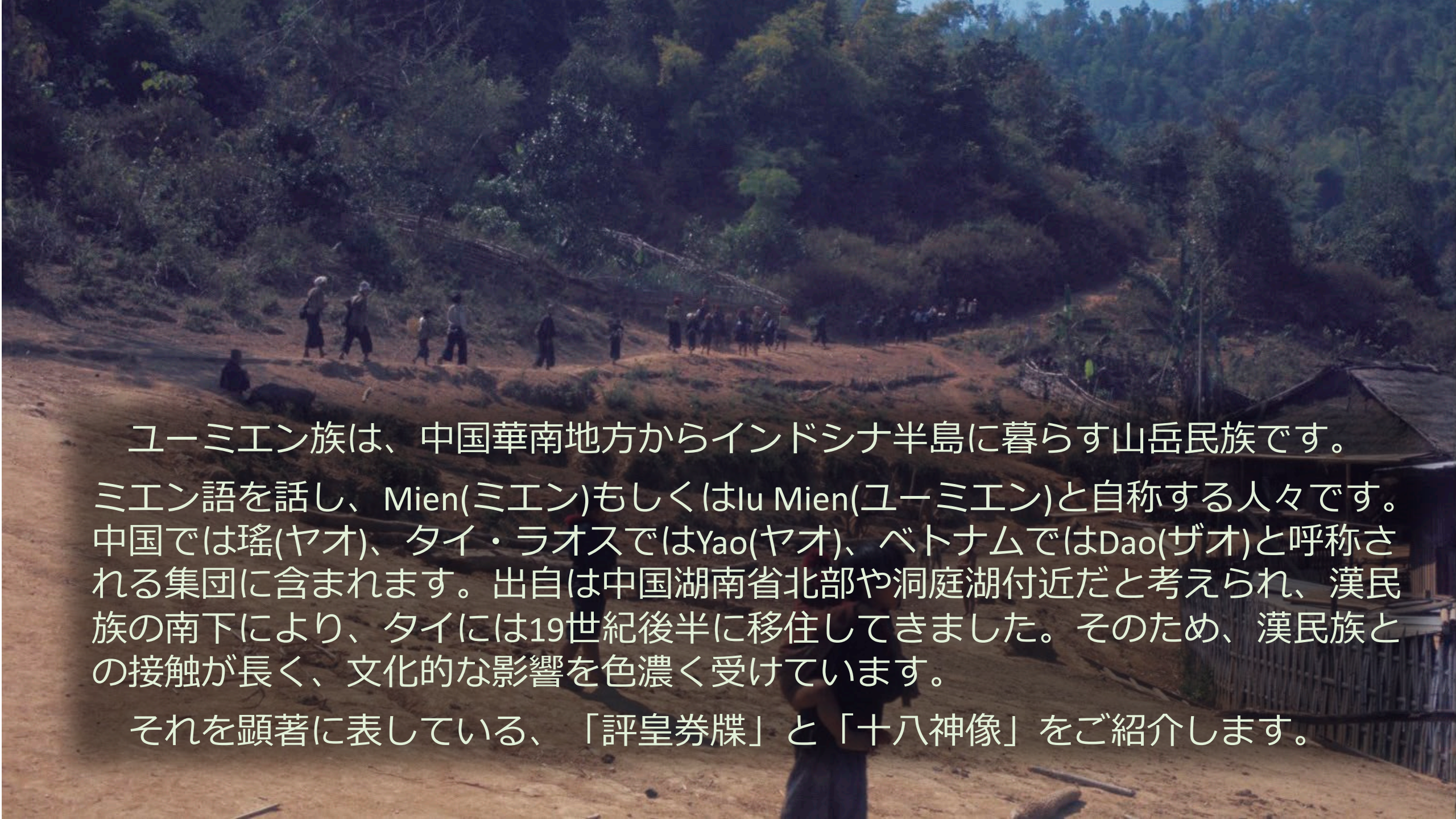
2020年度南山大学人類学博物館・明治大学博物館協定事業

オンライン交換展示

「ユーミエン族の文献と神画」

南山大学人類学博物館



ユーミエン族は、中国華南地方からインドシナ半島に暮らす山岳民族です。

ミエン語を話し、Mien(ミエン)もしくはIu Mien(ユーミエン)と自称する人々です。中国では瑤(ヤオ)、タイ・ラオスではYao(ヤオ)、ベトナムではDao(ザオ)と呼称される集団に含まれます。出自は中国湖南省北部や洞庭湖付近だと考えられ、漢民族の南下により、タイには19世紀後半に移住してきました。そのため、漢民族との接触が長く、文化的な影響を色濃く受けています。

それを顕著に表している、「評皇券牒」と「十八神像」をご紹介します。

南山大学人類学博物館が所蔵するユーミエン族の資料は、白鳥芳郎氏(当時上智大学教授)が団長として率いた「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」が、1969～1974年の間に３回実施した調査で収集したものです。

調査後は、上智大学に保管されていましたが、上智大学に在籍する最後の調査団員となった量博満氏の退職を機に、2000年に上智大学から当館に一括寄贈されました※。

寄贈された資料には、民族衣装や生活用具など2000点以上の現物資料のほか、調査時のカラースライドや8ミリフィルム、儀礼に使用される文書の複写などが含まれています。

評皇券牒

「評皇券牒」はミエン語で過山榜(キアセンポング)と呼ばれる、中国の皇帝から与えられた特許状です。ユーミエン族の出自に関する起源神話や、これを背景にした焼畑農業と移住生活の許可、租税免除の特権などが漢字で記されています。

しかし、実際に中国の皇帝から発布される勅書のスタイルとは異なること、架空の事柄が書かれていることから、中国皇帝から与えられたものではなく、ユーミエン族によって書き写されたものだと考えられます。

竹漉き製の紙を幾枚か継ぎ足して長尺にしてあり、その継ぎ目には直径12cmほどの朱印が押されています。

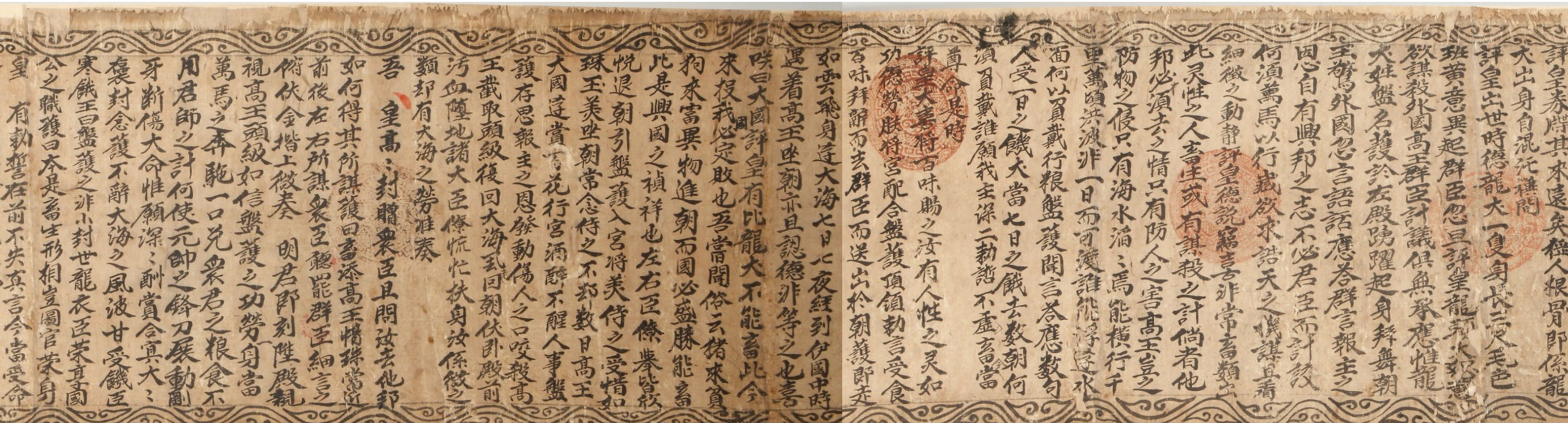
評皇券牒（ひょうこうけんちょう）　縦44cm幅640cm　チェンライ州ガオ県クン・ヘン村　1974年収集

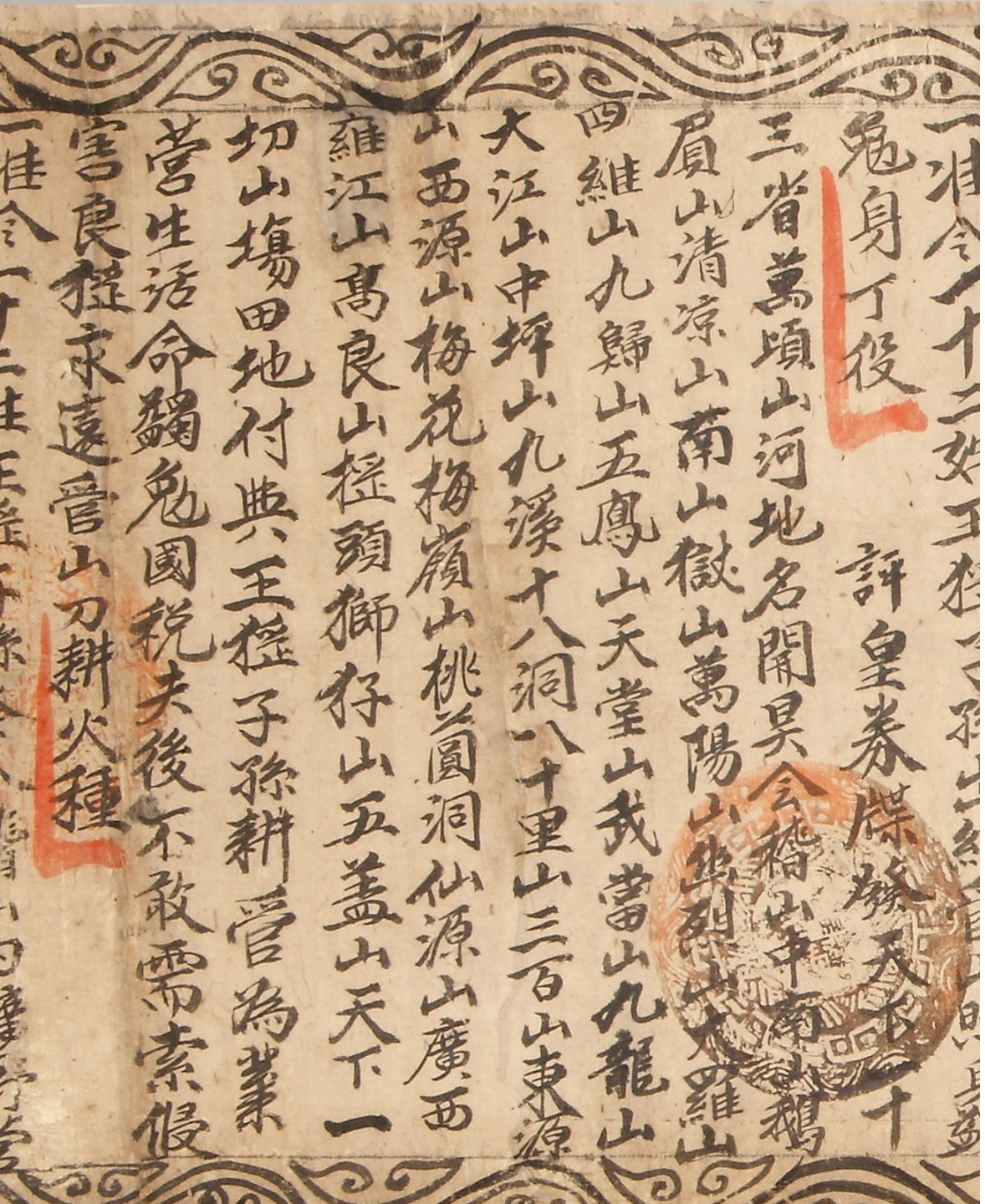
　巻頭には「評皇券牒過山防身永遠」とあり、「山地を移住するユーミエン族を評皇券牒が長きにわたって保障する」と記述されています。

　本文冒頭の「正忠景定元年」とは、1260年の南宋の皇帝・理宗の治世をさします。

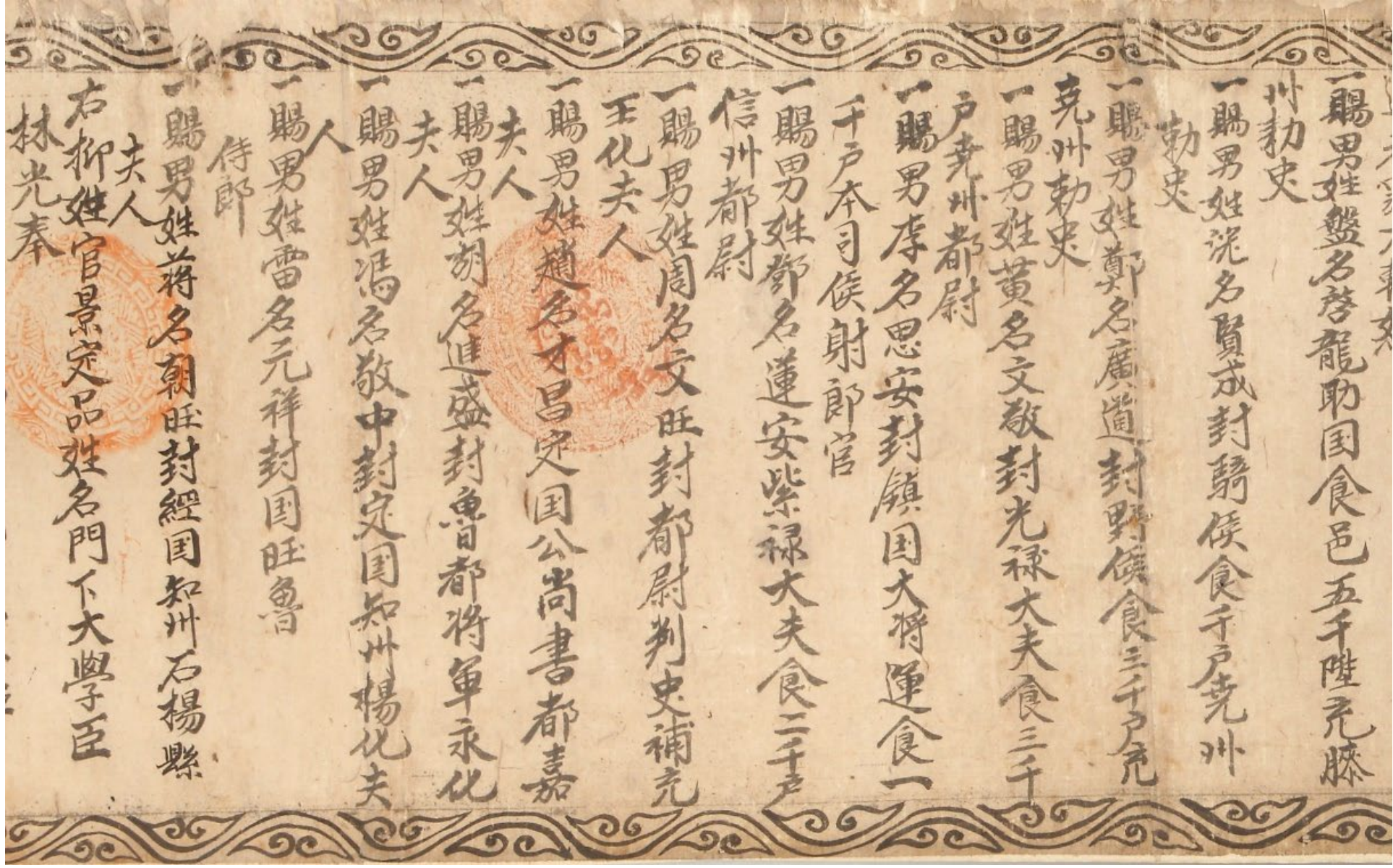
ユーミエンの起源神話に該当する前半部分には、「昔、盤護という霊力をもった犬がおり、盤護は皇帝のために敵軍を討つという功績をあげた。皇帝はその褒美として、盤護に自分の娘との結婚を許した。数年後、夫婦の間には6男6女の12人の子供が生まれた。12人の子供たちはそれぞれ姓を与えられ、長男には父盤護から受け継がれた「盤」という姓が、兄妹たちには沈・黄・李・鄧・周・趙・胡・唐・馮・雷・蒋の姓が与えられた。勅令により、子供たちは、それぞれ外から妻・婿をもらい、十二姓は脈々と受け継がれていった。」という内容が書かれています。

これは『後漢書』南蛮伝西南夷列伝に登場する「槃瓠神話」(「犬祖神話」)の内容とほとんど一致します。





　後半部分には「評皇券牒發天下十三省 萬頃山河地名開昊 会稽山…(山々の名前)…王猺子孫耕営為業　営生活蠲勉國税　夫後不敢需　索侵害良猺　永遠営山刀耕火種」とあり、評皇券牒が発布された十三省下の山地名が挙げられ、その山地においてユーミエン族は焼畑農業の許可、租税が免除されるということが述べられています。


一賜男姓盤名啓龍助国食邑五千陞充膝
州勅史
一賜男姓沈名賢成封駙侯食千戸充州
勅史
一賜男姓鄭名廣道封駙侯食三千戸充
充州勅史
一賜男姓黄名文敬封光禄大夫食三千
戸充州都尉
一賜男李名思安封鎮国大將運食一
千戸本司侯射郎官
一賜男姓鄭名蓮安紫禄大夫食二千戸
信州都尉
一賜男姓周名文旺封都尉判史補充
王化夫人
一賜男姓趙名才昌定国公尚書都嘉
夫人
一賜男姓胡名進盛封曾都將軍永化
夫人
一賜男姓馮名敬中封定国知州楊化夫
人
一賜男姓雷名元祥封国旺魯
侍郎
一賜男姓蔣名朝旺封經国知州石楊縣
夫人
右抑姓官景定品姓名門下大學臣
林光奉

その後、「一 賜男姓盤名啓龍 助國食邑五千 陞充膝州勅史　一 賜男姓沈名賢成…」とあり、十二姓の人物の姓名を明記し、その人物に与えられた官職や領土が記載されています。

ユーミエンの人たちにとって評皇券牒とは、自分たちの出自が中国皇帝につながる身分であること、特権的な地位を持つ種族であることの証明となり、山中における焼畑農業やそれに伴う移住生活を正当化するために所有されていました。

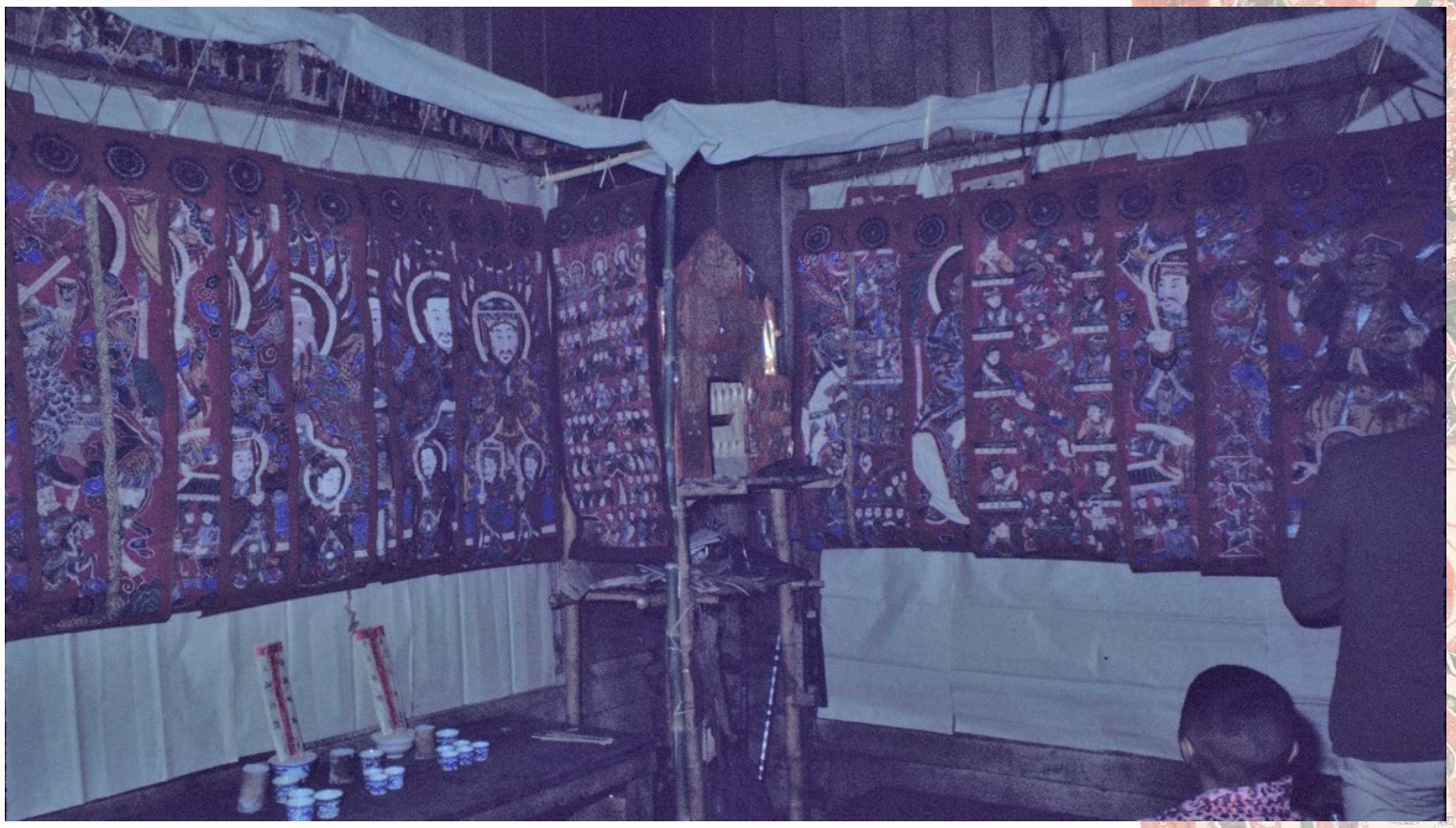
巻末には中国皇帝「評皇」が描かれている。

十八神像

十八神像17点　縦 約105cm　幅 約44cm
チェンカム州キーレック村 1972年1月19日収集

十八神像には道教の神々が色鮮やかに描かれています。ユーミエン族は重要な儀礼の際に、十八神像を祭壇の壁に掛けます。17～8幅を使用することから十八神像と呼ばれています。当館の資料は、17幅の掛け軸で構成されています。

十八神像は大変神聖なものであるため、不浄な手で触れないよう、手を清めてからでないと触ることができません。



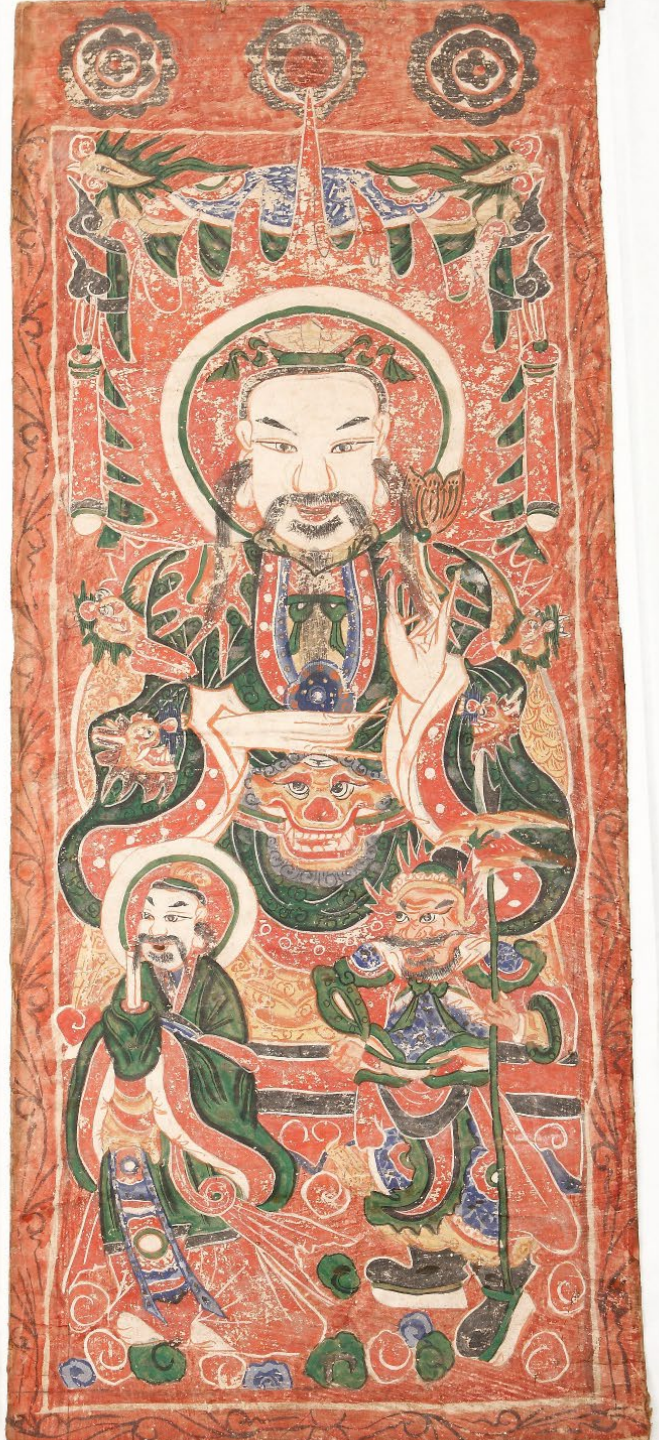
実際の祭壇の様子(上智大学西北タイ歴史・文化調査団撮影)

十八神像の配置には決まりがあります。玉清(元始天尊)を中央に掛け、その左右に太清(道徳天尊)と上清(霊宝天尊)が配置されます。中央に配置される玉清・太清・上清の３柱の神は三清と呼ばれ、道教の最高神として崇拝されています。サイドに配置される神画に描かれている神々は左右のどちらかを向くように描かれており、中央の三清を拝謁するように並べます。一番端に掛けられているのは、趙元帥と鄧大師という神画で、祭壇の守護を担う勇猛な武将神だと伝えられています。地府(地上を統べる神)と天府(天を統べる神)、李天師(ユーミエンの祭司の祖)と帳天師(法の伝授者)は対になるように配置されます。

なお、普段は祭司の家で大切に保管されています。誰もが所有できるものではなく、一定の儀礼を経た高位の祭司にのみ所有の権利が与えられます。

太清（道德天尊）

玉清（元始天尊）



上清（靈宝天尊）

　左から5番目に掛けられている拾殿(十殿)は、中央に地獄の様子が描かれ、左右には地獄において亡者の罪業の処断を司る10人の王が描かれています。
　10人の王とは、秦広王、初江王、宋帝王、五官王、閻魔王、変成王、泰山王、平等王、都市王、五輪転輪王をさします。

拾殿

右から5番目に掛けられている「壇」には、70柱以上の神々が9つの階層に分かれて描かれています。各階層の中央に、その階層における主たる神が置かれ、左右両側の神々は中央に拝謁する姿勢をとっています。

最上段は左から玉皇、太清(道徳天尊)、中央に玉清(元始天尊)、上清(霊宝天尊)、聖主が描かれています。

4層目の中央にいる三面六臂の神はユーミエンの始祖にあたる盤護であるとされています。↓

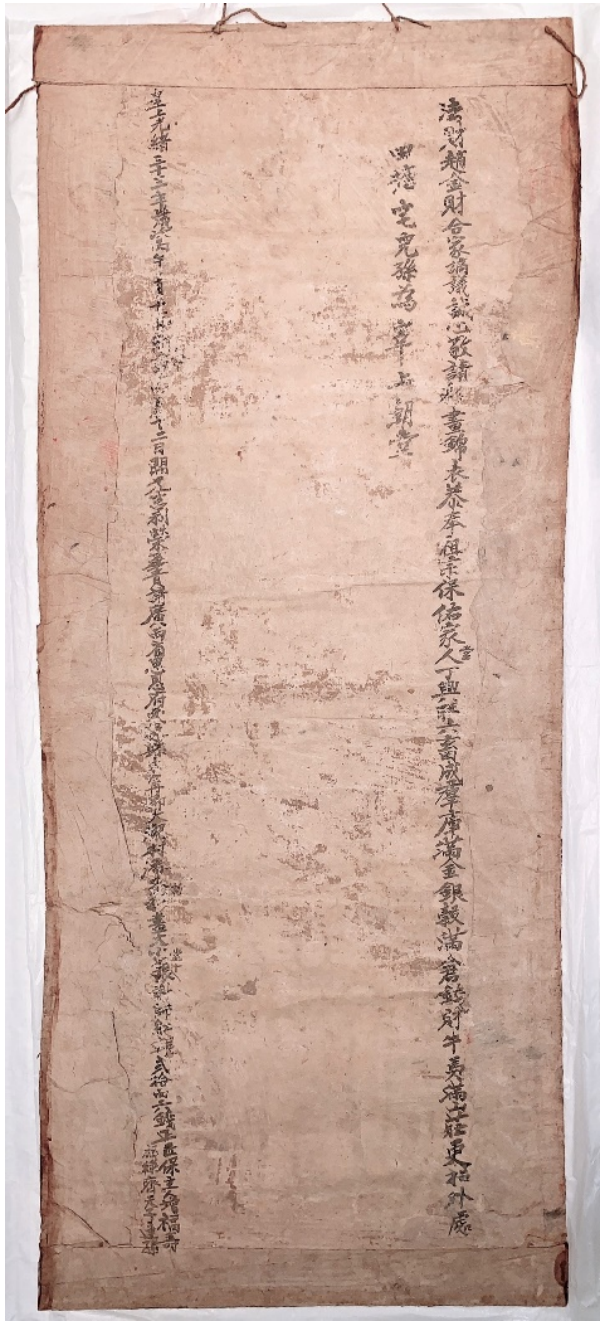
最下層には、象や虎に乗り刀を持つ武官が描かれています。

壇

右から2番目に掛けられている「大海旛」神画には、ユーミエンに祭司の術を伝えた人物とされる大海旛と、その左下には人々が刀の梯子を登る様子が描かれています。これは「上刀梯」という祭司が受ける儀礼を表しています。

大海旛

上刀梯



玉清 裏面

玉清 裏面拡大

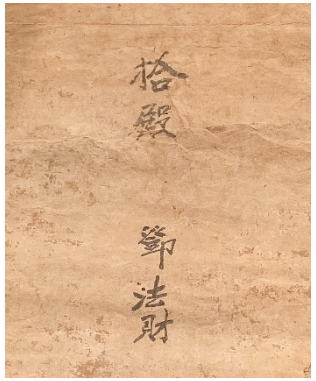
法財趙金財合家謫議誠心敬請彩画錦衣恭奉祖
宗保佑家堂人丁興旺六畜成群庫満金銀穀満倉
銭財牛馬満山荘更招外処
田壕宅児孫為宰上朝堂

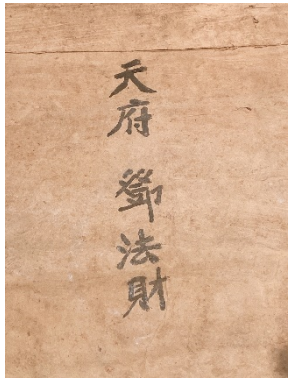
皇上光緒三十三年歳次丙午■■■■画■◆月
十二日開光吉利栄華貴請広西省恩府武候県永
寧郷大漁村潘■画大小堂十張謝師紅銀貳拾両
六銭正匠保主人増福寿　福禄斉天子連孫

十八神像の裏面には、文字が書かれています。

玉清神画の裏面には、この十八神像は、家主の趙法財が光緒33(1907)年に絵師に依頼して描かせたものであり、某月の12日に神画の開光儀礼が行われたことが書かれています。絵師は、広西省思恩府武候県永寧郷大漁村に住む潘氏であり、神画を制作するにあたって、20両6銭が支払われたことが分かります。

玉清以外の神画の裏面には、神画の名称と所有者の名前が記されています。





拾殿 天府 裏面

参考文献

カノミタカコ　1991　「神話の人々　タイ山岳民族の染織工芸」紫紅社

木田歩　2007　「「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」コレクション－調査団の研究目的を中心に―」『南山大学人類学博物館紀要』第25号　南山大学人類学博物館

白鳥芳郎　1975　「傜人文書」講談社

1978　「東南アジア山地民族誌―ヤオとその隣接諸民族―」講談社

1985　「華南文化史研究」六興出版

譚静　2015　「過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に関する総合的研究―神画と儀礼文献と儀礼実践からの立体化の試みー」神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　博士論文

吉野晃　2008　「槃瓠神話の創造？―タイ北部のユーミエン(ヤオ)におけるエスニック・シンボルの生成」『民族表象のポリティクス』風響社

※

上智大学とは同じカトリック系の大学で親しい関係にあること、白鳥芳郎氏が南山大学人類学研究所の客員研究員(1982-1988)・非常勤研究員(1988-1991)として在籍されたこと、民族学資料を所蔵する人類学博物館があること、以上の3点を理由に当館への寄贈が決定された(木田2007)。

南山大学人類学博物館